カラーグラビア

10年ぶり、象牙上陸

5月25日、東京・台場にある「ワールド流通センター」で行われた象牙の開梱作業。象牙組合のメンバーが登録に向けた作業をする中、プレス向けの撮影時間も設けられ、自然保護団体も顔を見せた。
（写真は木箱に入ったままのボツワナの象牙）

東京都江東区にある「ワールド流通センター」の広大な倉庫の一画に、大きな木箱がズラリと並んでいる。

中身は全部象牙だ。

5月25日、この倉庫に象牙印材メーカーらが所属する日本象牙美術工芸組合連合会（会長・櫻井実氏）のメンバーが集まり、種の保存法に基づく原材料器官等の登録に向けた準備作業が行われた。この後、象牙はいくつかの審査を経て各象牙メーカーの元へと運ばれる。

99年に一時輸入が行われて以来、10年ぶりの象牙だ。

昨年10月28日から11月6日にかけて、アフリカ4ヶ国で行われた入札で競り落とされた象牙で、総量は39トン、買い付け総額は約10億円。

実はこの象牙、1ヶ月以上前から日本に届いていた。しかし、ナミビア、ボツワナ、ジンバブエ、南アフリカの象牙のうち、南アフリカ以外の3ヶ国が書類の不備や紛失のため、運送会社の倉庫から動かせず、通関できないという状況に陥っていた。そのため、先行して南アフリカの分だけが開梱され、遅れて5月25日は残りの3ヶ国の象牙、約21・7トンが開梱された。

大きな木箱に何本も入っている象牙を取り出し、どこのメーカーが購入したのかをチェック。貼られたテープはジンバブエが赤、ボツワナが白、ナミビアが黄色と、国毎に色分けされている。開梱された3ヶ国のうち、ボツワナが一番量が多い。右ページ上の写真は、全てボツワナの象牙。大きさはまちまちだが、ベビータスク（子供の象の乳歯のようなもの）など、品質が良くないものは中国が買ったそうだ。また、ナミビアの象牙は99年の一時輸入された象牙よりも良質な牙が多かった。この倉庫から出荷された象牙は大阪には6月5日に到着。印材になって出回るのも近い（下写真は㈱タカイチに入荷した3ヶ国の象牙）。

大きな木箱から取り出された象牙は、サイズや質もバラバラ。象牙組合のメンバーは木箱から出した象牙に、輸出国毎に色分けしたテープを貼り、書類とつき合わせてどのメーカーが購入したものかを確認。その後、それぞれのメーカー毎に象牙が分けられる。

今回輸入された象牙について、同組合の櫻井実会長は、「中国と入札で争ったが、全体的に良質な象牙を厳選して競り落とすことができた。特にナミビアはサバンナ地帯なので割れの多いものもあったが、全体的には99年の一時輸入の時よりも良質だと感じる」と言う。

ちなみに、今回は南部アフリカの象牙なので、ソフト材ばかり。ハード材は中央アフリカに多いが、「国でストックしてあっても、政情不安などでとても輸出に名乗りを上げられる状況ではないだろう」（櫻井会長）。

次回のワシントン条約締約国会議は、来年、カタールのドーハで開催される。その時に、「象牙を保有するタンザニアが輸出を提案すると見られるので、日本での管理を徹底しつつも、希望を持って待ちたい」（櫻井会長）。